

言葉の乱れ

[聖書]創世記 11章 1～9節

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしましょう」と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

[序] ようがす ひき受けだ

NHKEテレビ「こころの時代」で5月22日、そして再放送が28日に行なわれた岩手県大船渡の医者山浦玄嗣（はるつぐ）さんの「ようがす ひき受けだ」は感銘ふかいものでした。磯部さんに録画していただきましたので、是非ご覧ください。山浦さんは地元では数少ないカトリック信者です。地元気仙地方の方言ケセン語で新約聖書の福音書を原典から翻訳し直して出版したことで、以前にもTVで紹介されました。

大船渡では80才以上の方は今回で3度の地震・津波被害にあっておられるそうですが、「なんしてこんな目にあったんだべ」と恨みごとを言う人が、一人もいないそうです。人生には死も災難も必ず起こる。でもイエスさまは、「災難を天罰と思うな」とおっしゃった（ルカ 13:1）。人は神さまの愛のふとこで生きている。神さまは私たちを用いてご自分の業を進めていらっしゃる。

だから「聞け」とおっしゃる。祈りとは神をほめたたえ、聞いていくことだ。自分は何をすべきかを懸命に聞いていくこと。「お前にはこれをしてもらおう」「ようがす。引き受けます」と行動を起こす。生きていても絶望して死人のように過している人がいる。しかし死は大きな喜びの生命への門口なのです——こんな言葉がぼんぼんと出てくるインタビューです。

この山浦さんが教会の受難週にの礼拝でも、ケセン語訳の聖書を朗読していました。地元の人には、地元の方言とアクセントで読まれる聖書が心に響いてくるのですね。暮らしの中で人と人とを結んでいる言葉の大切さをあらためて教えられました。

さて今日は、言葉の乱れから、大都市を造ろうとして始めた天まで届く塔の建設工事が、あえなく中断されたバベルの塔の話です。創世記に記された世界のはじめの歴史はこの11章で終り、12

章からは神に選ばれた民の歴史が始まります。大きな歴史の節目に位置する出来事なのです。その意味をしっかりと学びたいものです。

[1] 同じ言葉で同じように話す

11章1節の冒頭の言葉に先ず注目しましょう。「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた」。しかし10章をご覧ください。大洪水の後に、神さまの新しい契約のしるしである虹と共に、新しい人類の歴史が始まりました。ノアの子孫が海沿いの国々、シンアル平野からアッシリア地方、エジプト、カナン、東の高原地帯と四方に分かれて住み、それぞれの言語をもっていたと記されています。

ですから11章1節の世界中とはチグリス、ユウフラテス川流域のシンアル平野に移り住んだ者の立場で、この地方全域では皆が同じ言葉だったということになります。確かにここはメソポタミア文明発祥地であり、イスラエルを滅ぼしたバビロン帝国、そしてバビロンを倒して捕囚の民をイスラエルに帰還させてくれたペルシャ帝国が栄えた地域です。当時の世界の中心地域でした。

イスラエルの人々は、帰国したら自分たちの国をどのように再建すべきかを深く思いながら、その地方の文化・伝説を参考にして、創世記を記述していったのでしょう。国の発展に言葉が果たす役割に気がついて、それを信仰的にどう受取るべきかを考えたのです。

去年は日本の朝鮮強制併合 100 年の年でした。日本は朝鮮の人々の名前を日本名に変えさせ、日本語を教え、神社参拝を強制しました。その後、大東亜共栄圏というスローガンのもとにアジア諸国を侵略し、神社参拝、日本語教育を強制するという同化政策を進めた末に、大敗北しました。その反省から世界中の人が同じ言葉を使うということは危険だ、良くないという思いが私たち日本人の心に刻まれました。

しかし国際社会の一員として活躍するためにはせめて英語を話せなくてはならないと、小学校から英語教育が始まりました。私たち夫婦もシンガポールで 10 年暮らしてみて、言葉の違いには苦労しました。もしも私たちが英語・中国語をよく使えたら、もっと密接に地元の人々や教会と連携して幅広い働きが出来たことでしょう。現在の太谷牧師夫妻は英語が堪能ですからその点で、とても良い働きが展開されるようになりました。嬉しいことです。

ここで「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた」とありますね。言葉はいくら正しい単語を使っても、アクセントやイントネーションが違っていると相手に通じないのです。シンガポール人の英語はシングリッシュといって中国語風の独特のアクセントとイントネーションなので、分かり難くて苦労しました。宣教師のバーチ先生がマクドナルドで自分の英語が通じず、相手の英語も分からず、食べたいものが食べられなかったと嘆いていました。ですから言葉が一つであると共に同じように話すことが大切なのです。創世記の記者が実に的確に文化を捉えていると感心させられました。きっと彼らも捕囚の民として、言葉で苦労したのでしょう。

もしも世界中どこへ行っても言葉も話し方も同じで、誰とでも自由に通じ合えるとしたら、どこへでも気軽に出发して行きたくなりますね。何と羨ましい世界でしょうか。私たちの夢、理想的世界です。今日の世界の言語は約 8000 あるそうです。私たちの悩みは、言葉が違って、深く理解し合えないことではないでしょうか。

では当時の世界は、同じ言葉、同じ話し方で意思を通じ合わせて、何を得たのでしょうか？

[2] 大都市建設工事の挫折

3節「石の代わりにレンガを、しっくい代わりにアスファルトを」とあります。石を掘り出してノミで削って形を整えるのでは手間と時間がかかります。柔らかい粘土をこねて枠にはめて形を一定にし、よく焼いてレンガを作った方が、大量に建築資材を確保できます。またしっくいよりもアスファルトの方が粘着力があって、レンガをしっかり結合できますから、大規模な建造物を早く造れます。これは技術の進歩を言っているのでしょうか。人間は大勢の人と通じ合える言葉を武器にして、技術の進歩、文化の発展を得たのでした。そしてどうしたか。

4節「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」。天に届く塔のある大きな町を建てようとしたのでした。中国にも 600m の広州塔が建ちました。東京にも浅草に 634m のスカイツリーを建てています。マレーシアにシンガポールを越す高いビルが建ちましたら、シンガポールでもすぐさま更に高いホテルを建てました。人間は昔から高い建造物で誇ろうとします。面白いですね。

どうして有名になろうとするのでしょうか？ 散らされることがないためです。人間は散らばるよりも集中・集合を好むのですね。日本の人口の1/4は大東京圏に集中しているそうです。川越もその一部分です。どうして皆が東京へ東京へと集まるのでしょうか。とにかく人間は昔から、同じ言葉・同じ話し方によって、技術を開発し、大規模な工事を行なって、都市集中型文化をつくり、力を誇ろうとしてきたのでした。

ではこのような歴史の動きを、神さまはどうご覧になったのか。6節「これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない」。危険だと判断されたのです。技術の進歩、都市集中によるエネルギーの膨張、権力の強大化によって、人間はどんなことでもやってしまうようになる。そして誰も止めることができなくなる。ブレーキの利かない車ほど危険な物はありません。

私たちがシンガポールへ赴任した 1995 年に、オウム真理教のサリン事件が発生しました。村井という科学技術者のトップが「どんな大学や研究所よりもやりたい研究が自由にやれる」と数十億円の予算を示して、優秀な頭脳を集めたと言われます。しかし麻原教祖の言動をおしとどめることが出来ない教団は、大勢の人を殺して自滅しました。かつての軍国主義日本やナチスドイツの姿でもありました。

そこで神さまは言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまわれたのです。たった言葉の乱れだけで、人々は全地に散らされてしまい、町の建設大工事はストップしてしまったのです。そうです。大きな工事ほど事故の危険が多くなります。正しい伝達・意思の疎通が乱れれば、たちどころに事故が続発して死人・怪我人が増えます。人々は危険な仕事から逃げ出し、工事がストップしたのは当然でしょう。言葉が通じなくなった大都会は住みにくくなります。地方に分散して、気心の合った者だけで暮らした方が、生活水準は落ちても気楽です。こうして世界は現在 8000 と言われる多言語の世界になってしまったのです。

[3] 他民族複合国家の独裁政治

皆さん、創世記の第 1 章を思い出して下さい。神さまは天地万物をととても良いものとして造られた上で、人間に「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」という役割をお与えになりました。地に満ちてとは全地に拡がって住み着くことでした。

神さまの期待は、人間が全地に分散して暮らしつつ、なお一つの言葉で心を通わせ合いながら、世界を管理していくことだったのです。

ところが私たち人間は天まで届く塔、すなわち自分が神になって、散らされずに大都市集中型の強力な文化を造りあげ、思い通りに世界を君臨しようとしたのです。神のようになるという誘惑に負けて、禁断の実を食べて、エデンの園を失ったエバとアダムの轍をふんだのです。私たち人間は、まさにアダムとエバの子孫ですね。

シンガポールは、中国人 76%、マレー人 14%、インド人 7%、その他 3%、小さな島に集まる 470 万人の他民族複合国家です。公用語は英語・中国語(北京語)・マレー語・タミール語(インド語)の 4 種ですが、中国人は出身地によって広東語・福建語・四川語・客家語等々の方言を使っています。この方言が日本とは違い、まるで違う言語のようなのです。ここでは「one people, one nation, we are Singaporean」(我々は一つの民族・一つの国家・シンガポール人)というスローガンを何時も唱えます。一党独裁政権でデモも街頭演説も禁止です。政府批判の言論の自由は制限されています。しかし政治家や役人警察官の汚職が極めて少ないクリーンな国で、治安も良く、経済が豊かですから、民衆も満足しています。このように小さな島国ですら言論の自由を犠牲にしなければ、国家社会の一致は難しいのです。

これが中国となりますと、世界第三位の広大な領土に、人口 13.5 億人。漢族が 94%といっても、方言が多様です。更に周辺の少数民族 55 を併合しています。北京語の発音を基本とする中国語を公用語として教育していますが、日常生活の言葉の違いは、多様な思想や意思を理解し合って国民全体の合意を生み出すのに、大きな障壁となっていることでしょう。

シンガポール以上に一党独裁で思想・言論の自由を余程厳しく制限しなければ、バラバラに分散

せず、一致を保てないのは当然です。だからノーベル平和賞授与へも激しく拒否反応を示したのです。中国人教会に外国人が混じることも許されません。経済的に豊かになればなるほど民衆の欲望も多様化します。雑多な言葉の民衆を一つの国としてまとめていくのは至難の業です。市場経済を取り入れるという経済開放同様に、一党独裁政権は行き詰まり、変革せざるをえなくなるでしょう。

[結] 神の都の栄光

シニアルの平野に強大な都市国家を建てようとした人々の野心は、言葉の乱れで挫折してしまいました。では世界の言葉が一言語に戻れば、世界の人々は皆理解し合い、仲良く協力して、人類の文明を大いに繁栄させることが出来るのでしょうか。

人間が楽園を失ったのは、善悪を自分で判断して、神のようになろうとしたからでした。その結果、人が人を殺すという恐ろしい罪が発生しました。しかも兄が弟を殺したのです。家族という一番親密な人間の絆も、同じ言葉も殺人を食止めることが出来なかったのです。たとえ言葉が一つでも、各自が自分勝手に善悪を決めて行動する限り、殺人は起こる、戦争は起こるのです。

ですから、同じ言葉で意思を通じ合うという以前に、世界を最も良いものとして創造された神さまの言葉に耳を傾け、神さまの意思に聞き従おうとする心を持つことが求められているのではないでしょうか。その心を持てば、たとえ言葉は様々で、意思が良く通じ合わなくても、互いに愛し合って仲良く暮らしていけるのです。

聖書の一番終わりに歴史の終極に神が備えて下さっている神の都が記されています。「人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る」(黙示録 21:26)。世界中の人々が自分の文化の栄光と誉れを携えて集められる神の都。文化と言葉は切り離せません。ですから世界中の言葉がそのまま持ち込まれる都なのです。お互いの文化の栄光と誉れを喜び合える心を持って集まるのです。

お互いのあるがままを喜んで受けいれ合う——それが真の愛ではないでしょうか。イエス・キリストは悪魔に答えられました。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ 4:4)。愛の神の愛の言葉という共通語を持つならば、多様な文化・多様な言語は混乱と戦争の種にはならないことを、私たちはよくよく心に留めたいものです。

祈ります——神さま、言葉の違いで、私たちは苦勞しています。更に同じ言葉を話しながらでも年代や立場の違いから、意思が通わず、誤解や対立を生じてしまいます。神さま、言葉が一つになることよりも、心を通じ合わせる愛を先ず持たせて下さい。神さまの真の愛の言葉を聞きながら、その愛の言葉を一つ一つ使って、愛し合っていくことが出来るようにして下さい。そして言葉の違いを乗り越えていくことができるようにして下さい。異なる言葉を使って築き上げられているそれぞれの文化を、喜び合うことが出来ますようにして下さい。イエスさまの愛の御霊が力強く働いて下さいますように。 イエスさまのお名前によって、お祈りいたします。 アーメン 完